

---

# **悪質な異世界転移勧誘にご用心**

火田シャープ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪質な異世界転移勧誘にご用心

### 【Zコード】

Z6227Z

### 【作者名】

火田シャープ

### 【あらすじ】

神様による異世界転移勧誘を断りきった「ぼく」のお話。

「異世界」と言つたら何を思つて浮かべる？

ドーリー? 魔法? 剣?

お世のよつたな世界で繰り広げられる可愛こお姫様とのハーストーリー?

日常は余りにも退屈だから、しばしばそくはやつした仮想に逃避する。頭の中で空想するのは誰にも迷惑はからないし、非難もされない。だから辛い現実の清涼剤としてファンタジーな世界で冒険する夢を見たつていいと思つ。

だが、もしも本当に「異世界」なんて遠い世界に飛ばされたりになつたとしたら、君はどうするだらうか？

喜び勇んで出発する？

それとも断固として拒否する？

いずれにせよ、それらは自分で選択できた場合の話だ。意志などお構いなしに強制的に飛ばされたら、選択の余地などないのだ。そうした場合、責任の所在はどこにあるんだらう。まさか自己責任なんて野暮なことを言つんぢやないだらうな。

そんなのはまつぱりめんだつた。

異世界はあるが、日本から出たことのないことにとつて、国

外どころか惑星外どころか、世界外移動はいたせか荷が重すぎまる。

ぼくの行動範囲は「ぐく限られた地域で完結しているのだ。お菓子を買うコンビニと、本を買う本屋と、レンタルDVDを借りるレンタル屋さえあれば、ぼくはどこに生きていける。

「ぐく平凡の、ぐく当たり前の、慎ましやかな生活に満足している身としては、そんな寿命が縮むような大冒険などもつてのほかだつた。そんな恐ろしい体験は願い下げだつた。

この東洋の島国に生まれ落ちたからには、いち日本人として日本の領域内でぐくたばりたいじやないか。どことも知れぬ異国の地で果てるなんて、想像するだに恐ろしい。

そうは思わないか？

もしかしたら、とても前向きで、社交的で、コミュニケーショングスキルが万能な人ならば、異世界でもやつていけるかもしねれない。

剣で魔物を倒したり、魔法を覚えたり……。

うまくいけば英雄になつたりして、美人のお嫁さんを手に入れることができるかもしねない。

けれども、齡16歳にして世間の荒波にのまれたぼくとしては、そんな夢想じみた期待に身を任せられる程楽観的ではいられなかつた。

お母さんやお父さんや妹が、次々とぽんぽん死んでしまつたぼくからすれば、「死」は遠いところにあるわけじやなくて、頭のすぐ

上にぶかぶか浮かんでいるようなものなのだ。

日本においても、いつ落ちてくるとも知れない死が、異世界にいければどうなるのかなんて想像できない。

頭上でいつも落ちてやるつかと手ぐすね引いてスタンバイしている「死」は、隙あれば落ちてこようとする。なぜみんな気付かないんだろう。気付こうとしないんだら。

ぼくはいつもびっくりしながら毎日を生きている。

学校に行く前とか、コンビニに行く前とか、レンタル屋に行く前とか、そうする前には、いつ死んでも大丈夫なように部屋を片付け、準備をして出かけることにしている。

だつて恥ずかしいと思わないか？

ぼくが死んだ後に部屋が散らかっていたり、エッチな本が転がつたりしていたら田も当たらない。そんなことになつたら、きっとぼくは地縛霊になつて、以後自室に出没することになると思つ。

それで成仏をせようと訪れた坊さんに除霊されるのだ。「部屋は片付けておいたし、エッチな本は棺桶に入れおいたから安心して成仏しなさい」とか。

死んでまで羞恥プレイとか、本を机の上に置かれるより酷いよ。

え？ 当初の話題から逸れてる？

確かにその通りだ。いつももさつちもない状況に追い詰めら

れているせいか、思考が錯綜しているみたいだ、許して欲しい。

ほり、よく言つだろ？

人間、どうにもならない問題を田の前にすると、関係のないことを考えて逃避するつてさ。まさにその状態なんだ。

じゃあ、まずぼくの置かれている状況を説明しようか。

周囲を見渡す限りに真っ白な空間。先が霞んで見えないくらい、何もない。建築物も自然物も皆無だ。あまりに何もなき過ぎて息苦しささえ感じる程だ。

そのただっ広い真白な荒野に、ぼくたちは放り出されている。全校生徒合わせて350人くらいの高校だから、積み重ならないよう配置されると結構な広範囲に及ぶことになる。

みんな混乱していて酷い有様だつた。それが今では、押しなべて沈痛な表情で押し黙つてゐる。普段やかましいくらいにお喋りな女子たちも、お調子者の男子たちも、ついでに普段から滅多に口を開かないぼくも、みんなこけしみたいに御行儀よく佇立してゐる。

まあ、かいつまんで言つと、ぼくらは神様に異世界転移の勧誘を受けている最中なのだ。

そう、あくまで「勧誘」。

どうやら人間と神様では言葉の持つ意味も異なるようで、ぼくとしては、どう控え目に考えても「恫喝」にしか思えない「勧誘」を受けている。

一体全体、どういう因果でこんな田に合っているのか甚だ疑問だった。問うたところで答えてはくれないだろうし、生殺与奪権の一切を握られてこむいちらとしては、文句を言つことはできないのである。

ぼくは屠殺される前の肥えた豚になつた気がした。

少なくとも、數十分前までは、ちゃんとつまらないなりに人間をしていたはずなんだけれどなあ……。

「ちよつと、邪魔なんだけど。掃除できないでしょ」

放課後、教室に残つて本を読んでいたらそう注意された。ぼくは謝罪して机を移動させる。よく見るとPCRが終わって、みなは帰り支度を始めているところだつた。

ぼくに注意した女子は冷たい視線を向けて「早く帰らないかな、こいつ」という目をしている。ぼくは空氣の読める男なので、こうした冷たい視線には敏感なのだ。

彼女は長い髪をひとまとめにしていて、つり田の女子である。確か名前は……。

名前……、ええと。

……？

まあ、ツンデレっぽいキャラなので「ツンデレ」と便宜上呼ばせて貰おう。ですが、「あいつ」とか「これ」とか言うのは彼女に失礼である。

男女平等、男も女も等しく名前を覚えるのが苦手なぼくだが、異性への優しさや気配りは忘れないナイスガイなのだ。

ツンデレがてきぱきと掃除を始めると、自発的に彼女の友人たちが手伝いを始めた。何とも麗しき友情だった。ぼくが掃除当番の時は、みなさつさと帰ってしまうのはご愛嬌。

彼女と親密な雰囲気である男子は、男のぼくから見ても格好良い好青年なので「主人公」と呼ぼう。

それから彼女の親友ポジションにいる美人ながらも腹黒っぽいぱつつん前髪の女子は「腹黒」で、主人公の親友っぽいガタイのいい男子は柔道やつてそうなので「ジユドー」でいいだろう。なんか歐米風だし、とてもセンスがいいと思う。

彼らの人徳はなかなかのもので、みなでやれば早く終わるとばかりに人海戦術で掃除するつもりのようだつた。これならば、ぼくがひとりで掃除するときに比べて30倍くらい早く終わりそうだった。

まあ、頑張ってくれ。ぼくはレンタル屋にDVDを借りにいかなきゃならないんだ。

なのでさつさと帰りつつすると、腹黒が雑巾を手にこしかけりつつて来た。他の男子には人氣があるらしいが、ぼくは彼女の本性を見抜いているのでちつとも心惹かれない。彼女に比べたらシンデレラの方がよっぽどマシだつた。

「ちょっと、あんたひとりだけ帰りつてのー?」と腹黒にくつ付いてきたシンデレラががなり立てる。

……前言撤回。

腹黒は嫌らしい笑みを浮かべて、「よかつたら手伝ってくれないかな」と雑巾を差し出してくる。彼女はスタイルがいいので、近くに寄られるとドギマギしてしまいそうになる。それに何か良い匂いがした。

やれやれ、劣情は理性では制御できないままならぬものなのである。

気が付くとぼくは雑巾を片手に床拭きに励んでいた。

どうやら腹黒の術中にはまつてしまつたようだ。無念だ。

人海戦術で始めたせいか、進行速度は非常に早く、これならば10分もからず掃除は終わりそうだつた。全く、人類は力を合わせればこんなにも素晴らしい仕事ができるつていうのに、どうして互いにいがみ合つてばかりいるのだらう。人類みな兄弟。ラブアンドピースじゃないか。

ぼくの掃除当番のときも誰か手伝ってくれればいいのに。

ぶつぶつと内心文句を言いつつも、資本主義社会で飼い慣らされた社畜の「じとく」雑巾をかけていたそのとき。

教室を爆音が襲った。

ジャンボジェット機が頭のすぐ上を通過したみたいな爆音だった。とてもない超高音と、その後すぐにやつてきた空気を破裂させる大きな音にやられて、ぼくたちは床に転がった。

頭の中をシェイクされた気分だった。もしくは脳みそを前後左右入れ替えた氣分だった。

とにかく形容しがたい不快感を伴った衝撃を浴びた次の瞬間、ぼくたちは真っ白な空間に放り出されていた。

さっきまでいた教室は跡形もなく、どこまでも続く真白い地平線が彼方にあつた。ぼんやりとしていて距離感は掴みづらい、空を見上げてみても、やはり白色の空があるだけである。

「こ、こ、こ、こだらう、とぼくは思った。

直前の爆音からして、海を隔てた半島からミサイルが飛んできたのかと思つたけれど、そうだとしたら今頃火の海で目覚めているはずである。あるいは、そのミサイルで死んでしまって、この白い空間は三途の川と呼ばれる場所なのかもしれなかつた。

全校生徒が一同に集められた光景は壯觀だつた。

放課後だったので、帰宅した生徒や部活に行つた生徒もいるはず

なのだが、彼らもどうこいつらが集められていた。サッカー や野球のユニフォーム姿の生徒がちらほらと見える。

直後の混乱から回復すると、一斉にパーティックになつて騒乱の状態に移行した。無理もない。ぼくだって混乱して意味もなくうるさくなっているのだ。喚けば状況が解決すると言わんばかりにヒステリーを起すのは、正常な反応だろ？

それから30分後。

当初の混乱が収まつたと思こきや、「ijiはビリよー！」といつツンデレのよく通る声を皮切りに、めいめいの「どうなつてんの」「何かのイベントか？」「異世界転移かも」という希望的楽観、もしくは憶測が飛び交つ。

ぼくの三途の川説もそれなりだと思うので「三途の川かも！」と叫んでみるもの、誰ひとりとして反応してくれない。まあ、いつものことだ。

混乱し過ぎて暴動に発展しかねない勢いである。「モヤ闘争に不慣れな世代としては、安易な暴力沙汰は收拾がつかなくなるので勘弁願いたかった。

350人が喚き散らすと偉い騒音である。つるさんのが苦手なぼくは、辟易して両手で耳を塞いだ。

少し声の音量を下げる欲しい。近所迷惑だ。

『静まれ』

雷鳴の「」とく声は鳴り響いた。頭の中に直接語りかけられたみたいだつた。ある種の強制力を伴つた声は、場の騒音を一息でおさめてしまつた。

身体を硬直させる。視界の端では、ツンデレと主人公たちが見える。それぞれカップルになつて身体を寄せ合つてゐる。

ぼくもぞくさに紛れて同じようなことをしようと思つたのだが、運の悪いことに周囲は男子バスケ部と男子バトミントン部に囲まれていて女子がない。

生憎、ぼくには汗臭い胸板に欲情できるスキルの持ち合はせはなかつた。

『わたしは神。あなたたちを生み出した父なる神である』と声の主は自己紹介をした。転校初日にこんな自己紹介をすれば、たちまち人気者になれるに違ひない。

姿は見えない。遙か上空に雷雲のよつたものがじろじろという効果音と共に浮遊しており、それは綺麗な虹色の光を放つてゐる。とても神秘的だつた。

戸惑つぼくたちに構わず、自称神は以下のよつたことを一方的に告げた。何とも身勝手な振る舞いと一方的ロミヨニケーションは神っぽいと言えなくもない。

- ・君たちは選ばれし者である
- ・戦乱の異世界を救つて欲しい
- ・各自が望む能力を与えよう

何とも大盤振る舞いの条件である。特に最後らへんが胡散臭い。これに付け加えて、

- ・どなたでもできる簡単なお仕事です

とか載っていたら応募してしまいかもしれない。求人情報誌に載せたら、結構な応募者があるんじゃないだろうか。

こんな怪しい勧誘に乗るわけないだろ、と思っていたものの、意外なことに、生徒の殆どが乗り気のようだった。現実逃避していると言えなくもない。彼らは腰が引けつゝも、好きな能力を与えられる好条件のせいでの決断してしまったようだった。

近くの主人公パーティーもやる気である。まあ、こんな非現実的な状況に追い込まれれば、何かに逃避せずにいられないだろう。気持ちはわからぬもない。ぼくがファンタジー好きになつたのも、家族がみんな死んじやつたせいだしね。ああ、おばあちゃんはまだ生きてるけれど。

『感謝する、勇者たちよ。世界を救ってくれ』

と、契約に同意したであろう生徒の三分の二程が光に包まれていなくなつた。神様の言う「異世界」とやらに飛ばされたのだろう。彼らはどんな力を願つたのか興味深くもある。きっと漫画とかアニメの能力を参考にしたんだろうな、きっと。ぼくだってそうする。

残つたのは優柔不断で即決できなかつた者と、神様の言葉に疑念があつて即決するのを避けた者と、パニックで判断力を失つている者たちだ。

ちなみにぼくは、意図的に即決しなかつたわけであるけれど、もしかしたら判断を誤つたかもしれない。

先程まで静謐な雰囲気であつた神様は一転、怒れる神と化し、雷鳴は酷くなり、純白だった空は薄暗くなつた。気温も一気に下がつたように感じられる。偉い変わり身の神様である。まるで新入社員を確保した中小企業みたいだ。

神様はいつだつて自分に従う者には優しい代わりに、歯向かう者には一切容赦しないのだった。これはマズい状況だ。

『あなたたちの神が告げる。契約を受け入れ、異世界に旅立つのだ』と神様は言つて、『そうでなければ、わたしはあなたたちの命を奪う』

絶句。

先程がお願いだとしたら、今度は恐喝である。それもかなり直接的な。

神様の手にかかるれば、ぼくたちの命など赤子の手をひねるようこそ奪うことができるのだろう。それにしても、あんまりな話だつた。

ぼくはまだ16歳だし、ファーストキスはまだだし、女子と付き合つたこともないし手を握つたこともないのだ。やり残していることはたくさんあった。

不慮の事故で死ぬならともかく、こんなびっくりイベントで死ぬなんて冗談じやない。

なら神様の契約を受け入れて異世界に行けばいい?

冗談。ぼくはそんなにおめでたい頭をしていない。「異世界」なんて一口で済まされているけれど、同じ地球上だつて危険でいっぱいなのだ。ましてや異世界においては言わずもがなだらう。

契約を受けなければ死ぬ。

異世界に行つても死にそうな気がする。

そもそも能力をくれるという話が怪しい。もしも本当に言う通りの能力をくれたとしても、ぼくにその能力を扱えるとは到底思えない。特に戦闘に役立つ能力なら尚更だ。

異世界で生き残り、活躍できそなのは主人公やシンデレラたちだろ? 腹黒とかジュドーも何だかんだ生き残りそうな気がする。ぼくには無理だ。きっとスタート地点からそう遠くない場所であつさり死ぬに違ひない。ぼくは顔も性格も死に方もあつさり系男子なのだ。

「いや、こんなの脅しじゃないか!」

勇気ある男子が抗議の声を上げた。やや、もしかしたら、彼は生徒会長殿じゃないか。あの真面目そつた顔に四角いメガネ。生徒会長に間違いない。

彼は鬱憤を晴らすかのように「理不尽だ」とか「あまりに滅茶苦茶過ぎる」とか、神様に向かつて文句を言った。

閃光。その彼に落雷が落ちる。物凄い光と轟音が鳴り響き、衝撃でぼくたちは吹き飛ばされた。「ころごろと転がる身体。ほんの数メートル隣に落雷が落ちると、こんな衝撃が来るのか。実にハードな1日だ。

ふらつく頭を抱え立ち上がる。

生徒会長は身体の半分を炭化させながらも生きていた。いわゆるレア焼きである。もしかしたらミディアムかもしれない。ウェルダンでないのは確かだつた。

呻き声がする。意識もあるようだ。それが幸運なのか不運なのか。生きているのが不思議なくらいの重度の火傷だ。

残された生徒たちは顔を青ざめさせた。それはそうだろう。言葉だけではなく実力行使されでは、平和な現代日本に生きる高校生に抵抗できるはずがない。ろくに喧嘩もした経験のない連中なのだ、ぼくを含めて。

人肉の焦げる嫌な臭いがする。時折、身体を痙攣させる生徒会長は、今にも死にそうなかすれ声で、「け、契約、します」と息絶え絶え宣言した。

すると時計の針を巻き戻すように彼の怪我が治つていく。啞然とその様子を見守る生徒たち。当人も驚愕した様子で、復元されいく己の身体を見ている。まさに神の所業だ。

能力の提供もあながち虚偽でないのかもしれない。

その様子を見て、「契約します」「わ、わたしも」「お、おれ

もー！」とみな我先に契約を受け入れていく。契約を完了したそばから異世界へ旅立っていく。ひとり、ふたりと消えて行く。

次々と契約を受け入れる雰囲気が醸成されて、誰もが場の空気に流される形で異世界へと旅立つ生徒たち。

彼らは自分の頭で考えたのだろうか。日本人の悪いくせである、他人に倣えの精神がいかんなく發揮されているようにしか思えない。

人生における最大の岐路に立たされているのだ。もう少し慎重に吟味した方がいいと思うのはぼくだけだろうか。

確かに、目の前であんな暴力的光景を見せられれば仕方のない話なのかもしれない。でも考えてみると、あれはパフォーマンスにしか思えないじゃないか。わざわざ落雷という派手な演出をしたのがその証拠だ。

ぼくは旅立つしていく生徒たちの様子を見守りつつ、ある種の疑念が膨らむのを自覚していた。

やがてぼくの周囲には誰もいなくなる。残されたのは、ついにぼくただひとりになってしまった。

広大な空間にひとり残されると、不安を感じると共に開放された気分になつた。異常な状況に陥っているのに、ぼくは偉く開放された気分だった。まるでがんじがらめにされていた鎖から解放されたようだつた。

『わたしは神。あなたたちを生み出した神である』

もちろん、その開放感は錯覚なのだろうけれど。

神様は最後に残された人間の対処をどうするのだろう。ちっぽけな子羊に過ぎないぼくは、神様の気分次第で生徒会長のときみたいに雷にうたれたりするはずだ。

『再びあなたたちに告げる。契約を受け入れねば、命を奪うことになる』

ぼくは頭の片隅で考えた。日本から遠く離れた異世界の地で死ぬか、またはこの日本からそんなに離れていないと思いたい真白い空間で死ぬか。ぼくが自分で考え、吟味し、判断し、決断する天秤にかけてみて、どちらが望ましいかを選択する。ぼくはじきじきした。今ぼくは、命の選択をしようとしているのだ。誰によるのでもなく、誰のためにでもなく。自分自身の命を天秤皿の上に置き、その価値を見極めようとしている。

できればきちんととした日本の地で死にたかったけれど、贅沢は言つていられない。ぼくは異世界に行かないことに決めた。

どうしてそこまで諦めるんだ、なんて無粋なことは言わないで欲しい。

誰でだって、死んでも嫌なことはあるだろ？ ぼくにとって、それは見知らぬ異世界の地で死ぬことなのだ。そこには家族の墓もないし、弔ってくれる人もいそうにない。

だからせめて、ぼくは家族と少しでも近くに感じられる場所で死にたかった。

そりゃあ、やり残したことはたくさんあるさ。でも仕方ないだろ？ 人間、時には諦めなきやならないことがあるんだ。いつまでも躊躇して、捨て時を誤つてはいけないんだ。

「ぼくは契約を受け入れない」とやけに穏やかな心境で言い切る。次の瞬間には死んでいるかもしない。それでも構わない。享年16。いい人生だった。いや、家族を殆ど失つて、自称神様に拉致されて、多分神罰で死ぬんだから、波乱万丈の人生だったと言つべきだろう。

目をつむつてその時を待つていたのに、一向に苦痛はやって来なかつた。恐る恐る目を開けると、全て夢でした、なんてことはもちろんなくて、真白い空間にぽつんとひとりぼくは残されていた。

『……今回のノルマはこなしたのだ、まあ、ひとりくらごづくでもよいな』

とても世俗的な神様の『』意見だつた。神様の世界もいろいろと大変らしい。

まあ、ぼくみたいに「受け入れなければ殺す」と脅して、3回も拒否した人間を異世界に送つたとしても、大して役に立たないと判断したんだろうさ。むしろ善惡にある可能性の方が高い。見る目のある神様じゃないか。

頭上に浮かんでいた七色の雲が、少しづつ消えていく。それに伴つて、真白い空間が激動して消失していく。

地平線の彼方から、世界はブロック状にひび割れて崩壊し始める。周囲360度、ぼくを中心にして崩壊する空間。

逃げ場はない。神様はとうごじて帰宅なさいて、ぼくの最後など微塵も興味のない様子だった。さもありなん。

やれやれ、予想通りと言えば予想通りの最後か。

ぼくは迫り来る崩壊を無感動に眺め、死んだ家族のことを思い出した。こんな半異世界的な空間で死んでも、家族の下に逝けるんだろうか。うちは確か浄土真宗だった氣がするんだけど、こんな世界まで仏は出はってくれるんだろうか。ちょっと心配だった。この空間が創られているのが、できれば日本の領土内であればいいなあ、と思いつつ。

足元が砕け、ぼくは奈落の底に落下する。

「わっ」なんて情けない声を残して落ちていく。

しばらく落下を続けると、遙か彼方から光が迫る。それはどこか懐かしい色をしていた。さつきまでの気持ち悪いくらいに澄んだ純白ではない。様々な色が混ざった太陽の作り出す白色だ。

暗闇を一気に抜けて、ぼくは見慣れた世界に帰還を果たした。

落ちている。

見覚えのある街並みが目に飛び込んできたと思うもつかの間、高所から落下していることに気づく。下方は馬鹿でかい穴が掘られており、隕石が落ちたんじゃないかと思うくらいの直径があった。

そこに向かってぼくは落下していた。もちろん、ぼくに飛翔能力

はないし、着地時に衝撃を分散させる絶技を習得しているわけでもない。

高さにして4階ぶんくらい。落ちたら捻挫するビリのアキレス腱を切つてしまふかもしれない高さだ。……まあ冗談だけれど。

神様も味なことをしてくれる。元の世界に戻れたと喜ばせていて転落死させるなんて、まさに「持ち上げておいて落とす」じゃないか。

地面に激突する少しの間、ぼくは神様に散々悪態をつき、その時奇跡が起こったなんてもなく、位置エネルギー満載だったぼくは、物理法則に従って、いかんなく運動エネルギー満載の状態で地面に激突した。

足元から叩きつけられたせいで、両足はあり得ない方向に折りたためられ、次いで勢いそのまま背中を強かに打ち付けた。骨の砕ける音がやけに鮮明に聞こえたのは勘弁して貰いたい。幸いなのは、あまりに一瞬だったから痛みを感じる暇もなかつたことだろう。そして最後にヘッドバッド（後頭部）を地球相手にかましたぼくは、奮闘虚しく意識がとんだのだった。

そこには、奇跡的に軽症で済んだぼくの姿があつたのです！　と、

世界がまる見えちゃう番組ならばそういうことになるかもしない。しかしながら、家族がいつぱい死んじゃったり、胡散臭い神様に拉致されちゃうような幸運度しか持たないぼくに、そんな都合のいい奇跡が起こるはずもなく。

目を覚ましたのは、自称神様に拉致されてから2ヶ月後のことだった。

病院のベッドで目を覚ましたぼくを待っていたのは、膝から下の両足切断と下半身不随という現実だった。

現実とは非情であるとは誰の言だつたか。ぼくは異世界に行かず、しかも生きて日本に戻つて来れた代わりに、身体の半分を失つたのだった。通行料としては妥当かもしれない。

ぼくの現状を聞いて「あんまりだ!」という人はちょっとと考えてみて欲しい。世の中には、ぼくと同じくらいに悲惨な目に合っている人が実際に存在しているのだ。その人たちは生まれた直後から、あるいは後天的な要因によつてハンデを抱えることがある。

では、その不幸に見舞われた人たちは、「なぜ」そんな不幸に見舞われたのだろう。

答え  
偶然。

多くの人が不幸に理由を求めたがるけれど、実際のところ、不幸に襲われることに理由は存在しないのだ。誰の頭の上にも「不幸」はふかふか漂つていて、その人に偶然落ちただけなのだ。

不幸になるのに理由なんてないさ。

幸福でいられるのに理由なんてないと同じようですね。

「あなたは『なぜ』幸福でいられるんですか?」そうたずねられて答えられる人は少ないだろう。そもそも、現状を「幸福」だと気づいていない人も多いんじゃないだろうか。

友達が少ないとか、恋人がないとか。あるいは容姿が悪いとか。あまりに的外れの頂上を求め過ぎていて、肝心な足元が疎かになつてはいないだろうか。

何が言いたいのかと言えば、だ。

ぼくは身体の半分を失ったのだけれど、そこまで不幸になつたとは思っていないわけである。むしろ助かつただけ儲けものじゃないか。

さて、こんな取るに足りないぼくの現状を聞いていても面白くもないだろうから、ぱっぱとその後どうなつたのかを説明してしまおう。

学校」と自称神様に拉致された時、現実世界で何が起こっていたかと言えば、学校の建物丸ごと抉り取られる事態になつていたそうだ。ぼくが落下したクレーターは、その部分だつたわけだ。

ぼくの教室は2階で、さらに抉り取られたことによる地下部分の高さも合わせて、合計4階ぶんの高さから落下したのである。

当然、いきなり校舎が消失したわけだから近隣住民はパニックに

陥つて、警察はもちろん自衛隊まで出動する騒ぎになつた。

あの空間内と外では時間の流れが違つらしく、武装した自衛隊やら原因究明のための調査団が周辺を封鎖して2日目にぼくは帰還を果たしたのだつた。

突如現れ、地球ダイブをかましたぼくに日本政府はびっくり仰天。その結果、貴重なサンプルが虫の息になつたのには、さぞ慌てたことだろう。

迅速な原因究明の名由で各国が介入しまくり、ハンバーガー親分とかに頭の上がらない日本は、うじうじと首相が優柔不斷している隙にあれよあれよと海外調査団を受け入れさせられる羽目になつたのだった。

あくまで原因究明のため、なんてうたわれていたけれど、各国が狙つっていたのは確固とした証拠のある超常現象の情報だつた。街中で、しかも白昼堂々学校が消失したんだから、そこに未知の現象が絡んでいるとみて不思議ではない。その現象に、何らかの利益を見出したのだろう。

建物以下、内部にいた学校関係者が全て消えた中で、ぼくひとりが戻ってきたのだから、研究者たちは大喜び。治療と称して、ぼくの身体の至るところから生検サンプルをむしり取つていつたのだった。

人権？ 何それおいしいの？ とばかりにぶちぶち生検され、それに並行して治療は行われた。ぼくの存在自体は公になつていたから、丸ごと身体を持ち去るようなことにはならなかつたらしい。まあ、ラーメンさんとかウオッカさんとかハンバーガー親分なら、片

手間に実行できたんだろうけれど、幸運にも、生検の段階で、ぼくはまるつきり完全に完膚なきまでに普通人であることが判明したので、価値はなくなつたのである。

また、一週間を迎えた頃、他のサンプルが文字通り降つて湧いたことも関係しているのだろう。

学校消失の一週間目から、突如少くない数の死体がジャパンクレーター（後に命名。なんてひねりのないネーミングだろう）に出現し始め、研究者たちを驚かせた。

調べてみると、腕が吹き飛んでいたり、身体が焼け焦げでいたり、凍り付いていたりと様々で、何の面白みのないぼくから、そちらの方へ関心はシフトされたのだった。その上、遅れて帰還する死体の中には、異世界の装飾物と思われる品を身につけている死体もあって、研究者たちは喜び勇んで死体からそれらをはぎ取り研究に没頭した。

中には爆散していて、判別不能の死体もあつたりしたらしく、どういった理由でこんな多種多様な死に方をしているのか議論になつた。

その契約の場に居合わせたぼくには想像がついた。

恐らく神様から貰つた能力の暴発で死んだ連中なんだろう。考えても見て欲しい。いくら強力な能力を貰つたとしても、昨日まで一般的なホモ・サピエンスであり、一般的なホモ・サピエンス的生活しかしてこなかつた人間に、人知を超えた力を扱えるわけがないのだ。

そもそも、元来持つていい自分の身体さえともに扱えない人間が、どうして降つて沸いたびっくり能力行使できよう。そこら辺に落つこちていた銃を子供が拾つて、その銃口を覗き込むようなものだ。

これは推測でしかないが、能力を貰つた生徒たちは、異世界転移した後の初回能力発動時に暴発させてしまつたのだろう。なぜこんなにも多くの生徒が死んだのかは謎だが、転移場所がばらばらだつたり、能力を発動しなければならない止むに止まれぬ状況だったのかもしれない。

こんな自己の過失で死ぬようなことになるのなら、最初から能力なんて貰わない方が長生きできたかもしれなかつた。

ああ、でも契約には能力の付与が条件だつたから、何かしらの力を貰わなければならないのか。そうなると、安全を第一に考えた能力が良かつたのかな。

下手に「不老不死の能力」なんてものを要求していたら、あの適当な神様のことだ、バラバラになつても痛覚を感じて生き続ける、なんて生地獄を味わされる羽目になりかねない。文字通り、「不老」で「不死」であつたとしても、そこに「復元」まで折り込まれているとは限らないのだから。

ベストなのは、「好きな時にブラックホール化して死ねる」とか、自爆＆自決系の能力なんぢやないだろうか。あの切羽詰まつた状況下で、ネガティブ系の能力を思いつける人間がどれ程いたのか甚だ疑問だけれど。

さらに突つ込んで考えてみると、世界間の移動を可能にするよう

な神様に都合の悪い能力も、曲解して都合のいい能力にされたんじゃないだろうか。あの神様なら、全く悪びれもなくそのくらいやつてのけるに違いない。

そんなこんなで、消えた生徒の3分の2に当たる生徒たちは、死体となつて散発的に異世界から帰還を果たしたのだった。不幸にも、いいや、幸運にも死んだ後は日本に戻つて来られるらしい。自称神様にも優しいところがあるみたいだ。死んでからの方が優しいっていうのが、日本人に好かれない理由なんだろうな、あっちの神様は。

帰還した死体の中に主人公パーティーは含まれていなかつたらしい。お馴染みの主人公補正のおかげで能力を使いこなし、異世界を絶賛冒険中だつたのかもしない。

これで後に無事帰還できたら、「ガリバー旅行記」みたいに一財産築けたんだろうけれど、現実はそうもいかなかつたようだ。

それから一ヶ月後、細々と帰還していた今までのペースを一気に上回る規模の帰還死体がジャパンクレーターに降つてきた。その帰還死体に主人公とシンデレ、腹黒とジュドーが含まれていた。

他殺体と思われる死体もあり、何らかの争いに巻き込まれたという予想だつた。大きな戦いがあり、それに参加した連中のようだ。頑張つて生き延びてきた彼らも、大規模な戦場では幸運も続かなかつたのかもしれない。

残念ながら、主人公は「真の主人公」になれなかつたようだつた。

それでも、行方不明者リストの中には、1年経つた現在でも未だに帰つてきていない人物が存在する。きっと彼らこそが「主人公パ

「……」なのだろう。

戦い続けているのか、あるいは死ねない身体になつたせいで戻つて来られないのか。ぼくとしては、前者であつて欲しいと切に願う。あんな悪条件をぐぐり抜けた猛者には、敬意を表さずにはいられないじゃないか。

そんなこんなで、ぼくが昏睡している間に世界は激動し、目覚めた頃には騒動も収束しつつあったのである。こうしてリハビリをしつつ、日本帰還一周年を迎えてみると、何だか感慨深いものがある。身体の半分を失つたぼくは、現在日本政府の調査団に所属させて貰つている。役職は「特別相談役」。

一応、ジャパンクレーターの生き残りであるぼくを放り出す程日本政府は薄情ではなかつたらしい。保護されている身であるものの、広告塔を兼ねているので、テレビカメラの前で「政府に心から感謝しています」とめいといつぱい媚びへつらつっている。

唯一の肉親だったおばあちゃんも、ぼくが学校」と消滅したとう知らせを受けた時に心臓麻痺で死んでしまった。もうびっくりである。ぼくは知らぬ間に天涯孤独の身の上になつていたのである。

顔も知らない親戚の世話になるのも気が引けるし、障害をもつた未成年がひとりで生き抜ける程世間は甘くない。日本政府の思惑はどうであれ、支援をして貰えるのはありがたい話だった。

何の役にも立てないので心苦しい限りだが、ぼくが経験した白い世界での出来事は話ないとしている。勘とも呼べる危険を感じていたからだ。

ちょっとでも「神様」に関する情報をもらせば、その瞬間にぽつくり死する悪い想像が頭をこびり付いて離れないのだ。あれでも神様だ、ぼくの存在が少しでも不利益に繋がれば、遠慮無く命を刈り取るだろ？。

また、最近になつて問題が発生した。ジャパンクレーターの件で味をしめたのか、はたまた別の神様によるものなのか、他の国でも同様の事件が発生したのである。

この神様による拉致は、予測がつかないし対処のしようがない。まさに「天災」である。

そういうわけで、集団消失事件は未だにホットな話題性があるので、その最初の事件の生き残りであるぼくは、僅かながらの価値が認められたのだった。

世界の人々は、いつ自分が巻き込まれるか戦々恐々しているらしい。まあ、こればかりは運なのでどうしようもないだろう。

もしも巻き込まれたとしても、戻つて来られ、かつ生き残れる可能性は結構低い。何せ神様による「勧誘」を最低でも3回は断らなければならぬのだから。

やる気のある人間は進んで契約してしまうだろ？し、自殺願望のある人間は自暴自棄気味に受け入れてしまうだろ？。合理的に考える人間は、1回目に断つた人間が神罰を受けるのを見て契約するに違ひないし、他人に倣えをモットーにしている人間は言わずもがな。

さらにも3回を断りきつても、戻される場所によつてはアウトだ。

クレーター状に転移場所はえぐり取られるから、転移時に高い建物にいた人間は、戻つて来られても転落死してしまう。

そうすると、ぼくはそれなりに幸運な方だったと考えてもいいかもしけない。死んだおばあちゃんも、「悪いように考えんようにして」と言つていたしね。

命があるだけめっぽんなんです。

じつしてきちんと人間らしい生活をさせて貰つている。これ以上何を望めと言つのだ。

ジャパンクレーターの周囲に設置された研究機関の建物の中でぼくは暮らしている。そこがい悪い住み心地だった。

とまあ、つらつらと経験したことを語つたぼくが何を言いたいのかと言えば、悪質な勧誘には注意しろってこと。これは社会を生きる上でも必要な心得だよね。

齧われたり、あからさまに怪しかつたりするものばかりじゃないから気をつけなきゃいけないよ？

よくお耳を凝らして、よく耳を澄ませて物事を捉えるといいんじゃないかな。ぼくはもう思つよ。

施設を車椅子で移動していると、顔なじみの研究者に声をかけられた。彼は映画好きで話の命の間柄だ。これからレンタル屋に行くんだけど、ぼくのぶんのDVDも借りてくれるそうだ。

それはありがたいと、借りてきて欲しいジャンルを考える。

……。

そうだな、いろいろと酷い目にあつたけれど、ぼくは未だにこのジャンルが大好きなんだ。

ぼくは彼に、「借りてきて欲しいのはね」と前置きして言った。

「異世界ファンタジーものをお願いします！」

THE END

(後書き)

こんな異世界トリップもあるかもしません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6227z/>

---

悪質な異世界転移勧誘にご用心

2011年12月20日21時55分発行